毎月11日掲載

防災・減災のページ

むすび塾

巡回ワークショップ　@仙台市青葉区三条地区

備えの意識 共有が大事

住民と外国人との連携

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は5月31日、巡回ワークショップ「むすび塾」を仙台市青葉区の東北福祉大ステーションキャンパスで開いた。東北以外の開催も含めて通算32回目。仙台国際交流協会と東北福祉大の協力で、三条地区の町内会役員と、震災後に来日した留学生ら13人が、地域の防災対策や住民と外国人の連携について意見を出し合った。

三条地区に東北大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は5月31日、巡回ワークショップ「むすび塾」を仙台市青葉区の東北福祉大のステーションキャンパスで開いた。東北以外の開催も含めて通算32回目。仙台国際交流協会と東北福祉大の協力で、三条地区の町内会役員と、震災後に来日した留学生ら13人が、地域の防災対策や住民と外国人の連携について意見を出し合った。

三条地区は東北大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は5月31日、巡回ワークショップ「むすび塾」を仙台市青葉区の東北福祉大のステーションキャンパスで開いた。東北以外の開催も含めて通算32回目。仙台国際交流協会と東北福祉大の協力で、三条地区の町内会役員と、震災後に来日した留学生ら13人が、地域の防災対策や住民と外国人の連携について意見を出し合った。

館や宿舎があり、多くの留学生が暮らす。震災直後、避難所の三条中に母を寄せた1000人以上のうち9割を外国人が占めたという。

言葉の壁もあり、現場は混乱した。町内会役員らは当時を振り返り「お年寄り が避難所に入れなかった「自転車などを置いたまま引き取りに来ず、処理に困った」「トイレの使い方が汚かった」と不満を挙げた。

言葉が通じなくても、トイレにプールの水を運ぶ仕事を買って出た若い外国人がいた。役員の一人は「留学生の大半が若者。一緒に防災訓練をしていれば、いざというときに頼りになる」と期待を込めた。

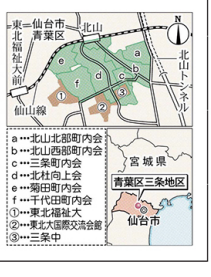
進行役を務めた国際交流協会の菊池哲佳主任は「留学生の中には「マナーの問題は国籍に関係なく、避難所ならどこでも起こりうる。地域の人たちが、普段から備えの意識を共有することが大事だ」と説いた。

日頃の備えについて、中国出身の邢炳（けい・へいん）さん（27）は「国際交流協会の国の食材や品物を扱う商店20分の場所にあり、一般の外国人が広がる。三条町、千代田町、菊田町など六町会があり、国際連合町内会に所属する。

会員の世帯数は2014年3月末現在、計2041世帯。近くに東北福祉大の国見キャンパスがあるほか、東北大の留学生や研究者、その家族が住む国際交流会館がある。周囲には外国人向け飲食店が多く、留学生がよく訪れる。

地域は留学生をはじめとする外国人の災害対応に積極的に取り組む。仙台国際交流協会や東北福祉大と連携して、外国人向け防災訓練を開催。北杜向上会は炊き出し訓練を定期的に実施。豊富な備蓄品を配分し、豚肉が入らない食事を用意する。

留学生ら生活 外国食材扱う店も



被災時の外国人支援や相互の連携について意見交換した参加者、ワークショップの前に、外国人向けの防災教室が開かれ、留学生が炊き出し訓練や自動体外式除細動器（AED）講習に取り組んだ

■むすび塾に参加して――仙台・青葉区三条地区

【震災時の経験】震災発生直後の避難所では、相示に従ってくれない外国人が多く、困った。ルールをもっと理解してもらえれば、避難所運営もスムーズにいくのではないか。

―菊田町内会長・小山和也さん（78）

【災害時の不安】災害が発生した時に、次々と発信される災害情報を、外国人が正しく理解できるか心配だ。防災についての知識や町内会の考え方を、日頃から伝える必要があるだろう。

―北山北部町内会副会長・門伝勉さん（73）

【参加して】非常時、住民と外国人が協力して避難生活を送れるようにするには普段のコミュニケーションが大切だ。むすび塾のような話し合いの機会を重ねつつ、日頃から声を掛けたい。

―三条町内会副会長・山形浩一さん（78）

【外国人への要望】非常時に、地元の住民と一緒になって、避難所の運営やさまざまな仕事に取り組んでほしい。地域全体で災害に立ち向かっていきたい。

―北杜向上会会長・高橋喜久雄さん（69）

【外国人への要望】皆さんのように日本語が上手な人たちが、避難所で外国人の避難者の通訳をしてくれたらとても助かる。災害発生時には、ぜひ通訳を買って出ほしい。

―国見地区連合町内会長・千田文彦さん（70）

■専門家から

多言語シート 周知図る

仙台国際交流協会主任 菊池 哲佳さん（40）

国際交流協会は震災前から「多言語表示シート」を作り、仙台市内の全ての指定避難所に配布していた。シートは炊き出しの時間などを外国人に知らせる内容になっていて、数カ国語で表記してある。

しかし、その存在が住民側に伝わっておらず、震災発生時にはほとんど活用されなかった。外国人が避難していることを自体、気付かない避難所もあったようだ。地域に外国人が住んでいるということを、もっと周知しなければいけないのかもしれない。

町内会との接点 提供へ

東北福祉大総務部災害対策課 結城 卓さん（36）

東北福祉大には約20人の留学生がいる。留学生寮では震災前から年に1度、防災訓練をしている。全学生を対象とする安否確認システムは、震災発生時にうまく機能しなかった。その後、システムを刷新して学生に登録を促すようにした。特に留学生に対しては、国際交流関係の担当部署と連携して対応している。町内会が地域の留学生や外国人との接点を持てるよう、仙台国際交流協会とも協力して交流や意見交換の場を提供していきたい。むすび塾がその第一歩になった。